

紫の上と光源氏

——『源氏物語』「若菜上下」の巻より——

江戸 英雄

要旨

『源氏物語』「若菜上下」の巻より、紫の上と光源氏にかかる問題、特に、紫の上が「かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをも」と考えて光源氏の六条院を去り、出家しようとしたことを取りあげた。『うつほ物語』「紫式部日記」などにみえる理想的な里邸と比較すると、明石の女御の里邸としてみた六条院春の町は、内容上問題を有していると思われる。ここでは、紫の上の六条院でのありようを検討し、同じく「おほぞうの住まひ」を案じた明石の君の場合に照らすなどして語句の位相を明らかにし、紫の上の「出家」を改めて意義づけた。結果、(1)『うつほ物語』から『源氏物語』へ引き継がれる文学史上のテーマ、(2)「おほぞうの住まひ」「みづからの祈り」などの解釈、(3)紫の上が六条院から退場するにあたって意識した「あぢきな」きこと、すなわち不条理の由来、(4)宇治十帖への発展的問題について明らかにし、新見を示した。

光源氏が四十歳であった年の夏頃、「桐壺の御方」（通称、明石の中宮）が懐妊し、宮中から六条院東南の町に退出した。

朱雀院の女三の宮は、同年の二月十日過ぎに光源氏との婚儀を行い、同じ町の西側の殿舎で暮らし始めたが、東の対に住む紫の上とはまだ会わず、この間、両者の関係は、ぎくしゃくとした穏やかでないものになっていた。

そこで、紫の上は、里下がりをした女御と会うにあたり、女三の宮もその座に加えることを提案した。光源氏は、六条院の調和を第一義に思う紫の上の配慮を甘受し、女三の宮に伝えて同席するように促した。対面の準備を進めるなどのいっぽう、しかしながら、紫の上には、胸の奥に仕舞い込んでいた思いがあった。

A対には、かく出で立ちなどしたまふものから、われより上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて、うちながめたまふ。手習などするにも、おのづから古言ふることばも、もの思はしき筋にのみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりと、身ながらぞおぼし知らるる。院わたりたまひて、（略）うちとけたりつる御手習を、硯の下にさし入れたまへれど、見つけたまひて、引き返し見たまふ。手などの、いとわざとも上手と見えで、らうらうじくうつくしげに誓きたまへり。

身に近く秋や来ぬらむ見るままに青葉の山もうつろひにけり
とある所に、目とどめたまひて、

水鳥の青羽は色もかはらぬを萩のしたこそけしきことなれ

など書き添へつつすさびたまふ。ことに触れて、心苦しき御けしきの、下にはおのづから漏りつつ見ゆるを、事なく消ちたまへるも、ありがたくあはれにおぼさる。
(若菜上、五―七八―八〇頁)⁽¹⁾

紫の上の歌は、目敏く感じ取った季節の推移を取りあげ、移ろう思いへのおのきの気持ちを重ねたかとみられる歌である。歌ことばの情趣や二首の脈絡を解するにあたっては、次の四首が参考となろう。

・身に近くなれし扇の風なれば秋は来ぬともいかが渡らむ

『大式高遠集』一〇五。「七月の晦日がたに、内裏より木工の蔵人の扇乞ひにおこせたりしに」との詞書がある歌への返歌⁽²⁾

〔好忠集〕九六

・見るままに庭の草葉は茂れども今はかりにもせなは来まさず

〔新撰和歌〕卷一、四〇

・秋の露うつしなればや水鳥の青ばの山のうつろひぬらむ

〔古今和歌六帖〕第三、水鳥、一四六八

・紅葉する秋は来にけり水鳥の青ばの山の色づく見れば

前の二首は言葉の用い方を検討するための参考歌で、後の二首は「古言」としても認め得る引歌である。年ごとに魅力を増す美しさからは思いも寄らない、紫の上の胸の奥底には、わが身のほどに感じる頼りなき、晴れない思い、不安が吹き溜まっていた。しかしながら、この胸のうちを吐露したような歌が、特に飾り立てて書いたというわけでもないようなのに、よく洗練された見事な書き様であったこと、つまり、筆の練習のようでありながらもそれとは一

線を描する手習いの歌でもあることに、光源氏は気づいたのであった。水鳥の青羽から山林の青葉に転じる歌ことばの発想から、私の愛情も、水鳥の青い羽根の色も変わらないけれども、萩の下葉の色が美しく変わるように、この歌は殊に素晴らしく書いていますね、と、紫の上を思う歌を、光源氏は硯の下から引き出した手習いの横に書いたが、この光源氏の歌があることで、「わが身には思ふことありけり」と知った紫の上の自己意識とでもいうべきものの輪郭―身の置きどころへの思い―は、全体にわたり辿れることになる。

さて、女三の宮とは「中の戸」を開けさせて初対面となった。「中の戸」は、部屋と部屋を仕切る戸であるが、これを開けることは六条院春の町から隔てを取り払う意義がある。初対面は、仲立ちに女三の宮の乳母の中納言を介して穏便且つ成功裡に終わった。何かの催しなどの折々に文が往来するようになり、紫の上を貶める風聞は、賛嘆の声に変わり、初対面についてか、それにさえ穏やかならぬ噂を立てた人々も、いつしか口を閉ざしたのである。

これは、紫の上が、落ち着いた態度で弱気を少しも見せなかったうえに、交誼を願うにあたって「今よりはうとかわらず、あなたなどにもものしたまひて、おこたらむことはおどろかしなどもものしたまはなむうれしかるべき」（八頁）と下手に出たこと、また、朱雀院から手紙で面倒をみるように頼まれたと言って安心させたり、潑刺とした様子で絵や雛人形のことなどを話して気を引いたりもしたことで、無垢な宮が「げにいと若く心よげなる人かな」（八二頁）と心を開いたためでもあった。また、女三の宮付きの女房たちに対してということでは特に、春宮の子を懐妊した女御をも育て支えてきた実績が、対面の場で、文句のつけようが皆無なほどに生きた結果でもあったといえよう。なごやかに語らうその母と娘の絆で栄華の中心が作られていること、これが六条院の調和の要であったのである。

そもそも、六条院は、六条御息所の旧邸を、拡大改築した邸宅であった。光源氏は、その姫君（秋好む中宮）を引き取り、紫の上とともに支え、冷泉帝の後宮に入内させたが、六条院には院内の西南の町をその里邸とすることので

り立ったという経緯がある。

加えて、六条院には、次代を担う子供たちが将来に備えて準備を行う場であるという一面もあった。東北の町で生活していた後嗣の夕霧は、六条院の折々の行事を通して他家の子息らと親睦を図ってもいたが、東南の町では、明石の姫君（明石の中宮）と兄妹の信頼を深め合うことに限って特に出入りの自由を許されてもいたのである。また、紫の上は、明石の姫君を将来の后に育て上げるために寝殿で暮らし、姫君の入内後は「東の対」に住むようになったが、この経緯は、木村佳織が論文「紫上の妻としての地位―呼称と寝殿居住の問題をめぐって」〔「中古文学」第五二号、一九九三年一月〕の中で示したとおりである。つまり、六条院春の町には后候補の明石の姫君の居住空間という性格が元来あったのである。

この六条院は、里邸の規模としては、まさに物語らしく最大規模であったことになるが、これは物語の発展性、光源氏とその子孫の栄華のために用意された大きさでもあった。しかしながら、その春の町では、玉鬘が光源氏の四十の賀を行った際に準備等で使用した春の町西側の殿舎が、新たに女三の宮の居住空間となったのである。

このことは、明石の女御の里邸という観点から考えると、問題があるように思われる。というのは、こうした住まいの変化は、后候補の里邸としての機能や魅力といった点からすると、負の印象を与えかねないからである。次節に示すように、寝殿と対を女御の里居の空間とし、もう一つの対で両親が暮らすということであったならば、里邸として理想的であると称して過言でなかったのである。

そこで、ここでは、紫の上にとっては、まさにそのために存在感を示す状況が生じたのではないかといったことを問題にしたい。女三の宮を迎え入れた光源氏との関係上、春の町が明石の女御の里邸として相応の構えを有していることを内外に示せる人物は紫の上を措いて適任者がいない。女三の宮との初対面にあたって、光源氏の妻というより

もむしろ明石の女御の母という立場のほうが―それは女三の官方の女房の目には乳母に近い者に映ったかもしれないが―鮮明になってきたのは、まさにそのためであったのではないか。

後に、冷泉帝が讓位し、新帝が即位すると、その第一皇子が数え年六歳で春宮に立った。「六条の女御」（若菜下、五一―五一頁）が生んだ皇子である。即位の前に新帝の生母承香殿女御が亡くなったので、後宮では寵愛を受け子宝に恵まれた「春宮の女御」（同頁）が時勢を得、立后が噂されるほどであった。また、讓位により「冷泉院の后」（同頁。秋好む中宮）は、より自由に過ごせるようになった。「六条の女御」と「春宮の女御」、そして「冷泉院の后」は、この新帝の即位後に初めて出てくる呼称であるが、これらが端的に示すように、明石の女御の春の町は新しい時代の六条院の核となるべき空間であったのである。

新たな帝の世となれば、明石の女御の母である紫の上は、当然重んぜられる立場になる。ところが、紫の上は、この頃から折に触れ、出家したいと真剣に光源氏に訴えるようになった。紫の上は、「今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをも」（若菜下、五一―五一頁）などと、何度も出家を願ひ出たものの、結局、光源氏は、頑としてこれを許さなかった。

出家はむしろ我が本意でもあると言う光源氏は、しかしながら、この紫の上の出家が、自分自身の出家のほだしを取り除くといった考えは少しもない。逆に、出家するなら自分が出家した後にするよう願ひたい、などと言って、紫の上の申し出を先送りにした。光源氏は、恩着せがましいわけでも、取り越し苦労をしているわけでもなかったが、これは紫の上には切り返し難い言い分であった。この出家の願ひは、紫の上の六条院での存在感を如実に示す所為であるともみられるので、具体的にはこの意義を問題として検討したい。

新帝は、父の朱雀院を安心させるためだけでなく、春宮の外祖父光源氏との関係を密にするためという意義からも、

異母妹の女三の宮を大事にし、朱雀院から推挙があるや、二品に叙して加封したのであった。当然その後、光源氏が女三の宮のもとで過ごす時間は長くなり、やがて新時代の六条院春の町は、西側が光源氏と女三の宮の居住空間で、寝殿から東は明石の女御とその皇女に関わる居住空間という、理想的な里邸のありように移行したともみられ得るのであるが、果たしてその後の紫の上は明石の女御が生んだ女一の宮を育てる新たな役割に心が癒やされるのを感じるのであった。

二

さて、紫の上は「かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをも」と思い、光源氏に出家を願ひ出たが、どのようなことを「おほぞうの住まひ」と思ったのか、さらに詳しく考えてみよう。

「おほぞう」は「おほぞうなり」の語幹で、辞書的には、特別ではなくふつうだ、もしくは、いい加減などと訳す語である。⁽⁴⁾ 問題の箇所については、通りいっぺんだ、と訳す校注書が多い。ここでは、参照するべき用例として、『うつほ物語』の二例を加えて五例を掲出し、『うつほ物語』などの事例で前節で示したことの根拠をも示しながら、この語の現れ方の異同や物語上の意義を検討したい。では、先ず『うつほ物語』の用例BとCからみていこう。

B〔略〕かの侍る三条の東角に向かひたる家、小さきあり。そこに渡りたまひていと心安くてもおしたまへ。身は、かくおほぞうなる所の、心を心に任せたまはねば、御迎へにとてなむ」
(蔵開下、二一―五八九頁)⁽³⁾

傍線部は、色好みの左大将藤原兼雅の邸宅「一条殿」の「南殿」について言ったものである。一条殿には、梨壺の母である嵯峨院の女三の宮のほか、兼雅の妻妾が幾人も居住していたが、南殿に住んでいたのは、そのうちの一人、故式部卿宮の中の君であった。

藤原兼雅は、北山のうっほで清原俊蔭の娘と再会するまでの十二年間、派手な色好みの生活を送っていた。しかし、再会後は、過去の色好みの日々からすっかり足を洗い、十年以上もの長きにわたって、ほぼ三条堀川の邸で俊蔭の娘と愛息仲忠と暮らしていた。そのために、一条殿の女君たちは、孤閨の恨みをひどく募らせていたのである。そこへ、春宮に入内していた梨壺が懐妊したとの吉報が舞い込んだ。ついては、嵯峨院への慮りも、入内した娘を持つ母の待遇も、当然相応にあるべきだという意見が仲忠からあがり、これに賛同した俊蔭の娘の後押しもあって、兼雅は、もともと梨壺の里邸として用意した邸である三条堀川邸の南殿に、女三の宮を迎えることにしたのである。いっぽう、これを潮に、一条殿の他の女君たちは、身の振り方を考えなければならないことになった。

一条殿は、東西に門を構え二町を占めた大邸宅である。寝殿から東の対にかけては女三の宮が住み、「南のおとど」には故式部卿宮の中の君、北の対には兼雅の異腹の妹、東の一の対には才人源仲頼の妹、東の二の対には故右大臣橘千蔭の妹、西の一の対には源宰相の娘、同じく西の対に、嵯峨院の後宮で色好みとして知られた梅壺更衣が住み、「召人めきたりし人」は対一棟につき二人で住んでいた。三条殿に俊蔭の娘と仲忠が住むようになった後は、一条殿が梨壺の里邸となったとみられ、その母の女三の宮が邸の「主」であった。女三の宮は、多くの財産を譲り受けた「財の王」であり、その住まいでは家司が大勢仕え、蔵では物の出納が盛んになされてもいた。しかしながら、ほかの女君たちの生活は異なり、特に中の君の住まいでは破れた屏風や色褪せた几帳を使用しなくてはならないほどに逼迫していたようである。

兼雅が女三の宮を迎える際に立ち寄った時、中の君は、所々破れた綾掻練の一襲に色褪せた白衣を着て現れ、多めの水で米を煮た「糲ひめ」のような主食少量に菹はじかみ、漬けた蕪かぶら、堅塩かたいしおを付して饗応した。傍には乳母の家族のほかに下仕が一人いるのみ。周囲を見回した兼雅は、しばし絶句して涙で袖をずぶ濡れに濡らしていたのであった。

その後、三条の新居に引き取る準備が整い、一条殿に迎えに来た兼雅が中の君に言ったことばがBである。「かくおほぞうなる所」の「かく」は、兼雅が見た、一条殿での中の君の生活を指したことばであり、「心を心に任せたまはねば」とは、空虚な日常への忍耐についていう。Bの「おほぞうなる」は、「いと心安くて」暮らせる新居の状況とは正反対の、かまびすしい豪邸でなおざりの扱いに甘んじ、心落ち着かずつらい暮らしを強いられるほかなかった状態を形容した言葉である。

C「誰かは。ここには知らで籠もりはべれば、おほぞうなるやうなれば。ここにかくて侍るほどに、いかで習はしたてまつらむ」。大将、「いと易きことなり。御書を仕まつらむ。その日と仰せ言を」。 (国譲上、三一五五頁)

Cは、第三子出産のために父母が住む三条大宮の邸に里下がりした藤壺(あて宮)が、孫王の君を介して右大将の藤原仲忠に、あなた以外に書の手本を頼める人はいない、里邸で皇子たちと過ごせる間に、せひともあなたの手本で書を習わせたいのです、と頼んでいるところである。藤壺は、梨壺よりも後に春宮の後宮に入内したが、春宮に大愛寵愛され、第一皇子と第二皇子を続けざまに出産していた。そしてその後、参内して春宮のもとにずっといたので、三条大宮の邸で育てられていた皇子たちのことを、十分に構っていらなかったのであった。

右大臣源正頼の三条殿は、光源氏の六条院と同じく四町を占める大邸宅であった。藤壺の里邸は、三条大路と大宮

大路に接した東北の町の「東の大殿」で、そこが皇子たちの住まいでもあった。

「沖つ白波」の巻の記述によると、この町では、藤壺からは姪に当たる女一の宮が、夫の藤原仲忠と「中の大殿」に住み、「南の大殿」は女一の宮の母仁寿殿女御の里邸、「北の大殿」には源正頼と妻の大宮が住んでいた。源正頼は、大家族の共存共栄を重んじる人物で、十人の息子と十四人の娘、そして孫らを、帝と東宮以外は婿をも含めて、三条殿の四町の内に、ほぼ住まわせていたのであった。

ところが、藤壺が第三子を懐妊して里下がりすることになると、藤原仲忠が「今日明日にでも女御・后にもなろうという方が対に住むようでは、どうして寝殿に上れましょう」と意見したのを受け入れ、息子や婿たちに三条殿の外に住むことを許可し、住み替えを図ったのであった。その結果、西北の町の用途は不明であるが、三条殿の他の三町の構成は次のようになった。東北の町は、仁寿殿女御を中心にその皇子皇女、両親の正頼と大宮、女一の宮と仲忠らが住む所に、東南の町は、藤壺とその皇子たちの里邸に、西南の町は、正頼のもう一人の妻大殿の上が住む所となったのである。

東南の藤壺の町は、八重山吹の高々と咲く下をせせらぎ行く遣り水に滝落としの変化を持たせた意匠、藤を這わせた松が並び立つ池畔など、春の花も秋の紅葉も趣深い、他所にはない大変見事な庭を有した。殿舎の中では特に、紀伊国の大富豪神南備種松に發育された源涼が、風光明媚な吹上の宮から移築して住んでいた西の一の対が素晴らしかつた。そこで、藤壺は、涼の北の方となった妹さま宮の勧めに従い、暗闇の中でも照り輝くというその西の一の対に住むこととした。これは、春宮候補の皇子には相応の住まいで過ごさせたいとの考えもあったのかもしれない。左大臣藤原忠雅と七の君の住まいであった寝殿は、清涼殿を模した殿舎であったが、その寝殿を二つに分けて設え、東を第一皇子、西を第二皇子の住まいとし、東の一の対は第一皇子付きの蔵人所、東の二の対は別当となった正頼の息男

「宮あこ」の侍従の居所と定め、西の二の対には第二皇子付きの人びとの侍所と藤壺に仕える人びとの侍所を、西の廊にはその他の人びとの曹司を設けたのであった。

このように、源正頼も、藤原兼雅と同じく、春宮に入内して懐妊した娘のためにその住まいを調整したのであったが、Cは、三条殿がこうした住みかたになる以前の事情を踏まえるものであり、傍線部「おほぞうなるようなれば」は、宮中で外のことを知らずに過ごしていると、当代随一の才学を有する仲忠に書の手本を頼むような格別の教育を受けさせることもできないまま、忙しさにかまけて皇子の教育が疎かになるようであるからと言ったものである。

さて、ここまで、二例の「おほぞう(なり)」の意味あいを検討しながら、『うつほ物語』から、春宮候補の皇子を出産した二人の姫君の里邸を取りあげてみた。以前に拙論『「うつほ物語」の邸宅』(『王朝文学と建築・庭園』平安文学と隣接諸字1、竹林舎、二〇〇七年五月。後に『うつほ物語の表現形成と享受』(勉誠出版、二〇〇八年)に所収)で明らかにしたとおり、『うつほ物語』では、住まいに関する表現が物語ならではの社会性、人間性の容れ物として、色々な意義を獲得するまでに到っていることが読み取れる。すなわち、住まいの構成等を細かく示すことを通して作中人物の立場や思惑、感情を際立たせるところがみられるのである。「国譲」の巻になると、藤壺腹の第一皇子と梨壺腹の第三皇子が次の春宮の位をめぐり対立することになるが、結局は、如上の里邸の規模の差が坊がねとしての地位の差に比例したことにもなる。立坊の後、第二皇子が西の対に移って寝殿が春宮一人の住まいとなり、藤壺は東に對に移った。また、元来は春宮妃のために用意した里邸であった住まいで、愛妻の俊蔭の娘と専ら暮らし続け兼雅の色好みの度合いも、並々ではないとわかる。『源氏物語』は、この『うつほ物語』の読者が創作した物語であり、当然このようなところにも共通点を有している。なかでも、四町を占め、入内させた二人の姫君の里邸でもあった源正頼の三条殿は、同様の規模を備える点で六条院の先例といえる邸宅であり、注目に値しよう。

『大鏡』によると、藤原兼家も東三条第の西の対を清涼殿造りで建て、内装も内裏風にしたとのことであるが、そのために、世人の聲譽を買ったということもあつたようである。しかし、「国譲」の巻の藤壺の里邸のありようは、むしろ后候補の藤壺や春宮候補の皇子の盛栄を示すにあたり、もっとも似つかわしい殿舎として機能しているものといえ、そこから、同様の殿舎を建てた兼家の思惑も、そして、帝の子を妊娠した娘の里邸に対する当時の理想像も、わかってくるのである。

ところで、寛弘五年（一〇〇八）に上東門第で彰子が皇子敦成を出産した時の記録『紫式部日記』によれば、九月十日の明け方に御座所の模様替えをして白の御帳台に中宮を移した、とのことである。十日の未明に産気づいた後、急ごしらえて用意した白の御帳台であるので、これは常の居所の近くに設けられたと考えられる。白の御帳台の周りでは、東に内裏の女房たち、西に憑坐たち、南に僧侶たちが詰め、御帳台の北の障子との狭い合間には四十人も人がすし詰めになり、熱気でのぼせ上がっていたとのことである。翌十一日の早朝には北の障子二間を開放して北庇に移し、いくつも几帳を立て回して御在所とし、必要最小限の人員のみをこの二間に詰めさせ、他の者は殿舎の南面と東面に退けたが、背面の几帳の外側を尚侍（道長の二女妍子）付きの女房たちが占めたため、「御帳二つが後ろの細道」は人が通行できなくなつたとある。この御産の場所は、皇子誕生から五日目の産養の記事に、御帳台の東二間に三十人以上の女房が居並び、そのほかの下級の女官たちが「寝殿の東の廊、渡殿の戸口まで」所狭しと詰めていて容易に通行できないほどであつたと記されていることから、『御産部類記』（図書寮叢刊、宮内庁書陵部、一九八一年）寛弘五年九月十一日条にあるとおり「寝殿北母屋庇」であつたと考えられる。

『紫式部日記』では、紫式部の居室が寝殿の東の渡殿の戸口辺りにあつたためであろう、上東門第の寝殿の西側の様子を記すが比較的少ないが、東の対は、三日目の中宮職主催の産養や五十日の祝いの際に西庇を上達部の座と

したことが記されている。出産から約一ヶ月後、一条天皇の行幸があった際は、御帳台の西面に天皇の御座所を用意し、西の対が上達部を饗応する場所となったことが記されているが、これは、寝殿から東側に中宮の居住域があり、西側に道長の居住域があることと対応しているとみられる。

建築史学の飯淵康一の論文「上東門第と小野宮第に於ける道長・頼通と実資の居所について―その違いと要因―」（日本建築学会計画系論文集）第六三五号、二〇〇九年一月。後に『統平安時代貴族住宅の研究』（中央公論美術出版、二〇一〇年）に所収）によると、上東門第と小野宮第とは、儀式の場が対の南面と対の寝殿側の庇とで相違するが、その理由は、小野宮第では寝殿が藤原実資の居所であったけれども、上東門第では、専ら寝殿が入内した娘の里邸として使用されたことにともない、対が藤原道長（頼通）の居所となったためであると指摘され、『小右記』長和元年（一一〇二）六月九日条に「相府婦西対」とあることから、上東門第での藤原道長の居所は西の対であったと明らかにしている。

こうした『紫式部日記』や古記録から得られる見解は、前引の藤原仲忠が源正頼に進言した、藤壺の里邸に関する意見に合致しているといえるが、これらの理想的な邸宅からの距離により、前節では、明石の女御の里邸としてみた場合、六条院春の町には問題があると指摘したのである。光源氏の常の居所は、西の対であるべきではないか、という懸念を世人に持たれかねない状況は、明石の女御の里邸としては落ち着かず、好ましくないのである。

「かうおほぞうの住まひならで」と思ったその時、紫の上の念頭の片側には、ここではないどこかに十全の住まいがあるとの思い、たとえば、二条院での信仰の生活を思ったのではなかったか。二条院は、六条院に移る前に光源氏と紫の上が住んでいた邸であるが、光源氏が須磨へ退去する際に紫の上が一切を管理することとなり、その後、紫の上は「二条の上」などと、貴人の妻を表す「上」を敬称されるようになったのであった。こうした紫の上の二条院の

管理経営については、宮川葉子が論文「紫上試論—紫上の社会的・経済的独立をめぐる—」（『中古文学』第五〇号、一九九二年十一月）で、二条院を紫の上の遺言で匂宮が伝領することも視野に入れて取りあげたとおりである。つまり、紫の上は、すでに光源氏の後押しを得て自立的に生きられるだけの生活基盤をも有していたとみられるのである。

紫の上は、出家を願うにあたって何の寄る辺もなかったわけではない。二条院を維持管理できる経営力、明石の女御を核とする次世代をはぐくんだ育成力、そして、六条院の調和を保持できる調整力もすっかりと身につけていたので、明石の女御が将来の帝と目される皇子を出産した後に、さらなる安寧を求めることができたとも考えられよう。

後藤祥子の論文『『若菜』以後の紫上』（『源氏物語研究（國學院大学源氏物語研究会）』七号、一九七九年一二月。後に『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会、一九八六年）に所収）に示されたとおり、紫の上は自分の優勢を保つたうえでいつも出家を希望していたとみられるのである。

三

このようにして、源正頼と藤壺の三条殿や藤原道長と彰子の上東門第といった先例実例と比較しつつ、光源氏と明石の中宮の六条院における女三の宮と紫の上という構図を作ってみると、物語にはすでによく似た構図があったことに気づく読者もいるであろう。それは、明石の姫君と紫の上の二条院と大堰の邸の明石の君という構図である。

D山里の人も、いかなど絶えずおぼしやれど、所狭よさのみまさる御身にて、わたりたまふこといとかたし。世の中をあぢきなく憂しと思ひ知るけしき、なかさしも思ふべき、心やすく立ち出でて、おほぞうの住まひはせじ

と思へるを、おほけなし、とは思すものから、いとほしくて、例の不断の御念仏にことつけて渡りたまへり。

(薄雲、三一—一八五頁)

Dは、姫君を紫の上に委ねて大堰の山荘で過ごす明石の君(山里の人)が思っていることを、光源氏が付度したという例である。光源氏は、明石の君のために二条の東院の東の対を用意していたので、そこで暮らすべきだとの意向を持ち、それを拒む明石の君を、身のほどをわきまえていないとも思っていたのだが、そう難じてみてもやはり不憫ではあるので、嗟嘆での念仏修行にかこつけ、大堰の山荘を訪ねたのであった。

Dの傍線部は、二条の東院の暮らしについていうものである。紫の上が光源氏の寵愛を受け二条院の女主として特立している状況では、その近くにいと、おそらくなおざりの扱いを受けるほかないから、心が落ち着かずつらい生活になろう、と明石の君が思っていることをいう。明石の君は、姫君を二条院で育てる話が大堰の山荘に伝えられた時に、自分も同行することについては、「さすがに、立ち出でて、人も、めざましと思すことやあらむ」(一五〇頁)と思量していたが、光源氏はこうした思いを酌み取っていたのであろう。これは、女三の宮の傍らで心穏やかならずに過ごしていた、故式部卿宮の中の君の暮らしを言った『うつほ物語』のBの用例に通じる用例であるといえる。

実は、紫の上は、女三の宮と初対面するにあたり、宮にどう見られるかよりも、「明石の君の恥づかしげにて交じらむ」と、里下がりをした女御に影のように付き添う明石の君のほうを意識し、身繕いをきりりと整えていたのであった。むろん、姫君の将来を思つて忍従してきた明石の君の立場でみると、姫君を預けた紫の上が立派でなければ、徒労感や落胆、悲嘆に襲われることになる。一族の悲願のために一身を捧げた明石の君には、なおざりにされながらも気丈に自分を律せられる確かな拠り所があった。上京しないで明石に留まった父入道を始めとする一族の後援が

心の支えになったことはいうまでもない。明石の君は、光源氏に寵愛されて二条院の女主となった紫の上の素晴らしさと勢威とを認めていた。だからこそ紫の上に姫君の母親役を委ね、自分は謙退できる、賢明さと愛情の深さがあった。いっぽう、紫の上には、虚勢を張ったり意固地になったりするでもなく、むしろ、そんな明石の君を意識することで身の置きどころが自然と定まってくるという人物の器の大きさ、女主にふさわしい資質が出来あがっていたのである。両者は、女御を支え六条院に繁栄をもたらしこれを維持するという目的で共存共栄していたのであった。

しかしながら、その目的に向かって進むうちに、同じような問題が紫の上にも、思わぬところから重なってきたのである。二人とも、「おほそこの住まひ」を嫌ったが、最初からそれをよく認識したか、後から深く思い知ったかという相違以上の、時間差だけでは説明がつかない比重の相違もあった。というのは、紫の上は、次のように、明石の君が光源氏に望まなかったことを訴え出るようになったからである。

E「されどもまた、世にすぐれて悲しきめを見るかたも、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人にさまさま後れ、残りとまれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それにかへてや、思ひしほどよりは、今までもながらふるならむとなむ、思ひ知らるる。君の御身には、かの一節ひととせの別れより、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、皆かならず安からぬもの思ひ添ふわざなり。高き交じらひにつけても、心乱れ、人にあらそふ思ひの絶えぬも安げなきを、親の窓のうちながら過ぐしたまへるやうなる心安きことはなし。そのかた、人にすぐれたりける宿世とはおぼし知るや。思ひのほかにも、この宮（女三の宮）のかくわたりものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、

それにつけては、いとど加ふる心ざしのほどを、御みづからの上なれば、おぼし知らずやあらむ。ものの心も深く知りたまふめれば、さりともとなむ思ふ」と聞こえたまへば、「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」とて、残り多げなるけはひ、恥づかしげなり。「まめやかには、いと行く先少なきこちするを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ。さきさきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば」と聞こえたまふ。

(若菜下、五一―一八八―一九〇頁)

六条院の女楽と称される、女三の宮が光源氏から教わった琴の琴を、朱雀院の五十の賀の前に内々にお披露目する催しが終わった後で、光源氏と紫の上が身の上話をしたところである。光源氏は、格別の愛情を掛けてきたことを、紫の上にはわかっていてほしい、という気持ちである。いっぽう、紫の上は、光源氏が、「ものの心も深く知りたまふめれば」と、人を育む力や嗜みを備えているようだを持ち上げたからか、がまんしようにもがまんしきれない、ただだため息ばかりが出る嘆かわしさをのみ少々身に染みつかせてきたせいかと謙遜しては、だからこそ、光源氏もまた「心安きこと」を心に掛けてきたとはいうようであるが、紫の上にとっても、まさにそれが「みづからの祈り」であったのですと切り返したのであった。『孟津抄』に「人の目には心安きやうなれど、自らの上にてはいかほども物を思ふとなり」とあるように、他人からみると安住してきたと映るようだが、自分自身としては少しもそんなふうには思えない、それよりも、安寧を願わないではいられないことが多かった、というのである。

もとより、この紫の上の「みづからの祈り」は、個人本位の「私の祈り」(初音、四―一二頁)の類とは異なり、自分のためにのみ行わせる災厄除去の祈禱ではないのである。光源氏や明石の女御をはじめとする六条院の人々、ま

た、その周囲の人々の安心安寧への願いを自分の願いとして念ずる「祈り」であり、具体的には特に光源氏や明石の女御らとともに住吉社に参詣し、神前で歌を詠むなどしたことと照応する「祈り」であったのではないか。もの思いの多い人生であるがゆえにかえって生きてこられたのだという光源氏のために、紫の上は、自分に何かできることがあると主張しているのではなからうが、精一杯のことを言ったのである。

紫の上は、院に加えて帝も格別に心を掛けている女三の宮の処遇について外聞の悪い評判が自分のせいで立つことを畏れた。だから、光源氏と過ごす時間が女三の宮と等分になってきたことを頭では理解し納得しながらも、予想どおりに光源氏から愛情を受ける機会が減じてきたことについて「安からず」思い、「さらむ世を見果てぬさきに心と背きにしがな」（一六二頁）とも願った。しかし、それでもその不安や望みを胸に収め、女一の宮の養育に心を砕き、暮らしていた。こうした六条院の繁栄と安寧のために自分を生かす宮みか紫の上の生きる力を支えていたのである。

真剣な話、と紫の上は続ける。「さきさきも聞こゆること」とは、前引の「かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをも」などと願ったこと。紫の上は、年も年なのにこのままその志に素知らぬふりをして出家を先延ばしにして過ごすことは気が咎めるのです、と再び言うのであるが、光源氏は、「それはしもあるまじきことになむ」と拒んだ。その理由については、「さてかけ離れたまひなむ世に残りては何の効かあらむ。ただ、かく、何となく過ぎてゆく年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。なほ、思ふさまことなる心のほどを見果てたまへ」とだけ言ったが、これが紫の上の出家話に対する光源氏のいつもの答えであるらしく、その答えを聞くとき、紫の上は、心の中で申し訳なさを感じ、目に涙を浮かべたのであった。光源氏は、六条院の繁栄に資することと世塵を脱離することとを両刀論法的に言う紫の上は、これらを自分の問題として引き受ける意志を示し、常日頃のくったくのない仲から生まれる嬉しさを大事にしたい、今後とも変わらずに、と言ったのである。そして、涙を浮かべ

る紫の上を慈しんでは気分を紛らわせたのだが、さてこのような二人にとって何が本當の望みであつたのかは「源氏物語」の重要な問いであるといえよう。ここでは、望みを叶えるために二人に許されることは何か、六条院とこれを取り巻く状況がいつもその問いを二人に差し戻してきた点を、比重の大きさ、事柄の切実さとして確かめておく。

さて、薫が「この人（浮舟）」の身の上を思索している次のFの用例は、薫が浮舟に取らせる行動のありようを「おほぞうに」と形容した点で、他と異なる用例になっている。

Fかつは、この人を、いかにもてなしてあらせむとすらむ、ただ今、ものものしげにて、かの宮に迎へ据ゑむも、音聞き便なかるべし。さりとて、これかれある列むらにて、おほぞうに交じらまじはせむは本意なからむ、しばし、ここに隠してあらむと思ふも、見ずはさうざうしかるべくあはれにおほえたまへば、おろかならず語らひ暮らしたまふ。

（東屋、七一三四三頁）

Fの「おほぞうに」は、紫の上が亡くなった翌春、光る源氏が紫の上付きの女房たちを「いとおほぞうにもてなした、つまり、心が慰むわけではないのだがおさなりに遇した、という「幻」巻の用例（六一二八頁）に通じる。

薫は、外聞のことを考えると都合が悪いので三条の宮邸に仰々しく迎え入れるわけにはいかないと決めたうえで、かといって、あれこれという女房並みの待遇で、なまじいに三条の宮邸で過ごさせるのでは本意にもとると思索し、当面の間、浮舟を宇治に隠しておくことにしたのだが、このFの傍線部は、「交じらまじはせ」る薫本人の意向に即していない状態を「おほぞうに」と言い表したものである。これは、肩身の狭い思いで無為に過ごすのではないか、と浮舟の身の上を特に心配しているわけではないのである。薫にとって、浮舟は特別扱いせずにはいられない存在であり、

そのために、薫は「おろかなら」ぬ態度でその日は一日浮舟と語らって過ごしたのだが、その特別扱いとは浮舟を大君の「形代」として遇することであった。

振りかえてみると、もともと光源氏にとっても紫の上は藤壺の中宮の代わりであったのだから、この点では、薫は光源氏の人物像を継承していることになる。しかしながら、この時の薫は、Dなどに見られたような光源氏ほどの包容力や優しさはない。薫は、その場かぎりの関係は本意でないと考えながらも、おざなりの身勝手さが自分にあることに気づかないのである。Fでは、こうした薫の心の動きを語るころから特に、その「おほぞうに」という表現について、鋭利な批評眼がさえわたっていることを指摘しておきたい。これは、作中人物に代表させていえば、「かうおほぞうの住まひならで」と願った紫の上の観点に立った眼だということになる。

ここでは、宇治十帖の問題は、光源氏と紫の上が抱いたような希望は現実は何らかのかたちを得られるのか、ということへの探究心より発していると捉えているが、物語に即して具体的にこれらの問題を取り押さえるためには、宇治十帖がこのような批評眼に曝されるほかない物語となっている点に注目するのが良策である。たとえば、大君が「かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をもかたみに見果すべきわざなれ」（総角、七一〇四頁）と思った点である。こうした『源氏物語』全体の中での宇治十帖の問題の広がり、すなわち、紫の上の人物像を引きずって八の宮の姫君たちが登場した理由などを確かめていくためにも有効な観点として、ここに付しておく。

四

ところで、紫の上が初めて女三の宮と対面した場に光源氏は不在であった。二条の宮に住む臘月夜のもとに出掛け

ていたのである。

G 今宵は、いづかたにも御暇ありぬべければ、かの忍び所に、いとわりなくて出でたまひにけり。いとあるまじきことと、いみじうおぼし返すにもかなはずりけり。
(若菜上、五一八〇頁)

臘月夜とは、女三の宮と紫の上が初対面する日よりも前の、女三の宮の婚儀が終わり、朱雀院が出家したすぐ後に、すでに密会し、往時の逢瀬を思い返しては数年来の空白を埋めあわせていたのであった。

かつて、臘月夜との密会は身の破滅と皮膜を接した情事であった。臘月夜は光源氏をよく思わない右大臣の六の君であり、密会の現場を右大臣に押さえられたことがついには須磨退去の引き金となったのである。このむこうみずともいえる光源氏の行動は、「例の御癖なれば」(賢木、二一―四四頁)と説明されるとおり、光源氏の「癖」に由来していた。「尋木」の巻頭のくだりで「あながちに引き違^{ちが}へ心尽くしなることを、御心に思しとどむる癖なむ、あやにくにて」(二―四五・六頁)と示された、光源氏特有の性癖である。むろん、光源氏は、平安時代の社会生活に無難に適応できる謹直な品位を備えてはいた。だが、いっぽうでは、これと思い込んだら決して中途半端にはしておけないというタイプの、ほどほどや慎みを美德とする価値観からみるといっふう変わった短所を持った人間でもあったのである。

女三の宮との結婚直後の密会についても、右大臣に露見したことで途絶えてしまった仲を、そのままにはしなかつたという点に、こうした癖をみてとれよう。物語には、これは「癖」に動かされたのだという、はっきりとした語り手のことわりはないが、逢いたい理由は、「年ごろも忘れがたく、いかならむ折に^{いとむ}対面あらむ、今一度^{ひとたび}あひ見て、そ

の世のことも聞こえまほしくのみ」（六七頁）思い続けていたからだと示され、また、歳月を重ねてからの再会は、強い懐かしみの情もあることから、ときめきで夢中になるものであることを、「今はじめたらむよりもめづらしくあはれにて、明けゆくもいとくちをしくて、出でたまはむ空もなし」（七二頁）と語っている。

とはいえ、Gの逢瀬は、傍線部が端的に示しているとおり、きっかけはまったく別であり、光源氏の不在は、六条院春の町のために作り出された状況だったのである。

振り返ってみると、出家前の朱雀院と対面した光源氏は、万人が認める立派な春宮が女三の宮のことを疎かにするはずがないと言っういっぽう、それでもなおしっかりとした面倒見の良い人が欲しいのであれば、分相応の夫を決めておくべきだ、と進言した。前に内意を伝えられた時には、冷泉帝の後宮に入内させればよいと考えていたにもかかわらず、朱雀院との対面の席で一転して態度を改めたのである。その経緯ははっきりと語られることがなく、当座のいわば呼吸の中で決まっていくなのであるが、大朝雄二の論文「女三の宮の降嫁」（『講座源氏物語の世界』第六集、有精堂、一九八一年）に、朱雀院が出した婿の条件を満たす人物が光源氏以外にいなかったことに加え、院と春宮の間で話が付いたことを光源氏が断れるのかという問題があるという指摘がある。春宮が朱雀院に、「親さまに」（三三頁）光源氏を頼ってはどうかと勧めていたこと、また、光源氏の進言に照らしても穏当な筋道だとみられるが、さて、この間に光源氏がどう六条院の未来像を描き直したかも、紫の上のためを思ったかも、語られてはいない。話がまとまった後にこのことを懸念し、六条院に女三の宮を迎えることになったと紫の上に伝えるにあたっては、「しかじかの経緯を説明して、「誰も誰もものどかにて過ぐしたまはば」（四四頁）との願いを言っうえ、あわせて、紫の上にとって不愉快なことが多々起こると予想しては、その方策として、ただ紫の上に隠忍自重するようによくよく言い聞かせる以外にはなかったのであった。

むろん、これは、紫の上の側からすれば、受け入れがたい事柄である。しかしながら、女三の宮との新婚三日目の夜、「今宵ばかりは道理と許したまひてむな」(五五頁)などと困惑して訴える光源氏に対して、まったく取り付く島もないように反応し、途方に暮れる光源氏を、強い口調で追い立てさえたのである。もちろん、こんな修羅場を見せられては、女房たちは不安に陥ってしまう。心配する女房たちに、持ち前の明るさと賢さで今はどこにもつらいことなどないかのように、機嫌良く世間話をするなどして心を配っていたが、仕舞いには、女三の宮には心おきなく過ごしていただきたいのだと女房たちに訓戒を与えもしたので、古参の女房からは賛嘆の声すら上がったのであった。

奇しくも六条院のほかの町から、「いかに思すらむ。もとより思ひ離れたる人々は、なかなか心安きを」(五八頁)という声が届いても、それらの声に紛らせられることもなかった。自分のことを何かしら推量する人のほうがむしろ苦しいのだ、世の中はこれからどう転ずるかわからないのだから何も悪いようにばかり思い悩まなくてよいのだと前を向いたのであったが、果たしてその視界に見えてきたのは、達観の境地へ紫の上を押し上げる、過往の己が人生であつた。

日あまり久しき宵居も、例ならず人や咎めむと、心の鬼におぼして入りたまひぬれば、御衾参りぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬこちすれど、かの須磨の御別れのをりなどをおぼし出づれば、今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世のうちに聞きたてまつらましかばと、わが身までのことはうち置き、あたらしくかなしかりしありさまぞかし、さてそのまぎれに、われも人も命堪へずなりなましかば、いふかひあらまし世かは、と思し直す。

(若菜上、五―五九頁)

傍線部は、須磨退去の折に「そ二人とも亡くなっていたら、という開き直りである。また、「命こそ絶ゆとも絶えぬ定めなき世の常ならぬ中の契りを」と詠みかけてきた光源氏への共感と反発であるとともに、「目に近く移れば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな」（五六頁）と嘆いてしまうような、弱い自分への訣別であるともいえよう。『湖月抄』に「此須磨の事にて思ひなほし給ふ心哀也」という北村季吟の感想があるが、共感できる読者は多からう。いっぽう、夢枕に紫の上を見た光源氏は、鳥の音が聞こえるやいなや、東の対に戻ってきたが、格子を叩くにあたって「なほ残れる雪」（六〇頁）と口にした。これは、『弄花抄』に「楽天が作を誦したるばかりなり」とあるように、一部が朗詠され知られていた、白居易の「庾楼の暁望」と題した詩の中から引用したとみられる。この引用については、『細流抄』に「楽天詩に、子城陰処猶残雪。子城とは北の方をいへり。紫上の方は北也。誦し給へる。心面白し」と評されているが、光源氏は、戸を開けさせる口実に、ただ詩の一部だけを引いて、そこで白詩の美しい世界をかいま見せようとしたのであろうか。

庾楼暁望

庾楼の暁望

独憑朱檻立凌晨 独り朱檻に憑れば立ちどころに晨を凌ぎ、
 山色初明水色新 山色初めて明らかにして、水色新たなり。

竹霧曉籠銜嶺月 竹霧、曉に嶺に銜める月を籠めたり、
 蘋風煖送過江春 蘋風、煖かに江を過ぐる春を送れり。

子城陰処猶残雪 子城の陰処に猶残れる雪、

衙鼓声前未有塵 衙鼓の声前に未だ塵有らず。

三百年來庾樓上 三百年來、庾樓の上、

曾經多少望郷人 曾經て多少の望郷の人あらむ。

〔白氏文集〕卷十六、九一(6)

「庾樓」は、白居易の貶謫先である江州（江西省九江市）にあった名勝で、晋の庾亮が建てたと伝わる楼である。白居易は、都から到着した時に作った詩（九〇五）にこの楼の南が任地だと認め、後に杭州に左遷された時にも、この楼に立ち寄って往事を思い出している（二三二〇）。白居易にとって、「庾樓」は、時に登楼して、郷愁の情を慰めたり、人生の浮き沈みを思ったりする場所であったのである。「子城」とは本城に対する出城、出丸の意であるが、東の対は「子城」にあたるのと指摘はとるには及ばない。

この詩については、第二句が『千里集（句題和歌）』遊覽部の八〇番歌「雲もなく明かき山さへ晴れゆけば水の色こそあらたまりけれ」の詞書、句題になっているほか、第三句から第六句までが『千載佳句』（上、春暁、八〇、第四句「暖」）に、さらには、第三・四の対句が『和漢朗詠集』（巻上、秋、霧、三四一、第四句「暖」）にもとられていることにより、詩に表現された風情ある光景が、平安時代の人々に愛好されたとわかる。光源氏もまた、機転を利かせて庭の景色を見るように促す意で口にし、女房に戸を開けさせようとしたと考えられる。

加えて、玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店、一九六六年）の第七卷二二〇頁には、光源氏は紫の上を恋う「望郷の人」になっているとの指摘がある。いかにも、光源氏もまた、早暁、東の対の簀の子から欄干越しに庭の景色を見、白居易が謫居の地で作った詩を思い出しては、紫の上の東の対を不在にしたわびしさ、もしくは、須磨謫居の時のつらさが胸をよぎった、と想像する自由は許されるであろう。

もとより、光源氏は、須磨に退去した折のことを紫の上が思い出していたとは知るよしもなかった。また、この暗

合は、紫の上だけが知るべきことに属するものであったために、その偶然からもたらされた感情の交流は、表立てては語られない。光源氏は、「いにしへの事」をいろいろと思ひ出しながら、うちとけてくれない紫の上に、日がな一日「恨みごと」を言い続けるほかなかったのである。しかしながら、そんな不満も、紫の上と過ごすうちにやがて収まるのであり、女三の宮に不参の言い訳をするにあたって、「今朝の雪に心地誤りて、いと悩ましくはべれば、心安き方にためらひはべり」（六一頁）と、ふと言ってしまうのであった。こうして、女三の宮を迎え入れた六条院の紫の上と光源氏には、読者をやきもきさせるような関係ができたのである。

いったい、光源氏が女三の宮と結婚したことから受けた衝撃を、須磨と都で生き別れになった体験を思い出しては紛らわせ、事態を達観しようとした紫の上と、その結婚後すぐに、須磨退去への導火線となった朧月夜と密会し、過去の空白の埋め合わせをした光源氏とは、これ以後何によって心を通わせ続けたのであろう。

朧月夜との再会は、直ちに紫の上の知るところとなった。紫の上は、少し頬を緩めては光源氏の若返りを揶揄してみせたものの、「昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」（七五頁）と言って涙ぐんだのであるが、光源氏は、こういう時は遠慮なく抓るなどして叱ってほしい、本当の気持ちを胸に秘めて、私を遠ざけないでほしいと和解を請うたのであった。八方塞がりになりかかった状況に対して開き直った光源氏は、紫の上その人の心を開くことが大事だと、先ずその方向へ舵を切ったのである。これは、光源氏の例の「癖」に関わらせていえば、朧月夜との再会に向けて働いたという以上に、紫の上や光源氏本人に対して働いた、また、ほどほどから逸脱したのだということになる。光源氏の癖は、紫の上あってこそその光源氏だとの再認識をもたらし、光源氏の〈日常〉をいっふう変わったものとして際立たせ、光源氏をして光源氏たらしめる作用をしたのである。

こうして、紫の上は、我が身のほどには何ら頼りになるものがないことを、ただお見せしてきたばかりではあろう

けれども思いながら、光源氏にとって自分がどのような存在であるのかを思うようになったのであった。

五

紫の上は、自分が信仰の生活に入ることでも満ち足りたものが得られると認め、今の六条院の暮らしは、落ち着かず、心苦しい、と思うようになった。ここでは、紫の上のこの思いがどのように積みあげられたか、また、他の用例に照らすなどして、次のIの「おほぞう」の位相を問題にしたのである。出産のために春の町に里下がりをした女御は、結局、冬の町に移って御産をした。陰陽師が移るように勘申したためである。春の町が里邸としての役割を十全に果たせずとも、この点は冬の町で補完できたのである。

I 春宮の女御は、御子たちあまた数そひたまひて、いとど御おほえ並びなし。源氏の、うち続き後にゐたまふべきことを、世人よひと飽かず思へるにつけても、冷泉院の后は、ゆゑなくて、あながちにかくしおきたまへる御心をおぼすに、いよいよ六条院の御ことを、年月に添へて、限りなく思ひきこえたまへり。(略) 姫宮の御ことは、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対たいの上うへの御勢いきほひには、えまさりたまはず。年月経るまゝに、御仲いとうるはしくむつびきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、「今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと、見果てつるこちする齡よひにもなりにけり。さりぬべきさまにおぼしゆるしてよ」と、まめやかに聞こえたまふをりをりを、「あるまじくつらき御ことなり。みづから深き本意ほんいあることなれど、とまり

てさうざうしくおぼえたまひ、ある世に変はらむ御ありさまの、うしろめたさによりこそながらふれ。つひにそのこととげなむのちに、ともかくもおぼしなれ」などのみ、妨げきこえたまふ。（若菜下、五一―一五一・二頁）

波線部「ものから」について、二人の仲は実は表面的なのだとみるような見解は、とらない。「この世はかばかりと、見果てつる心地する齡にもなりにけり」とも言っていることから、阿部秋生の論文「紫の上の出家」（『国文学論叢（慶應義塾大学）』第三輯、一九七二年五月。『光源氏論―発心と出家』（東京大学出版会、一九八九年）所収）に説かれるように、出家の理由の一つは年齢にある。また、阿部秋生の他の論文「六条院の述懐」（『東京大学教養学部紀要』第五五輯、一九七二年五月。同書所収）では、紫の上が出家によって六条院との関係を「変えようとしている」意義につき、紫の上なりに「人生というものの意味を問題にしていた」ことになると指摘し、「女三の宮がこの院にいるという現実に応じた結果として、『この世はかばかりと見はてつる』という新しい精神状況をもってしまっている」と読解している。ここでは、波線部につき明らかにした結果として、紫の上が六条院で果たしてきた役目を踏まえて新たな時代の六条院の未来のために出家を位置づける「観点」が必要になることを強調しておきたい。

六条院の安穩と繁栄は、「かうおほそこの住まひならで、のどやかに行ひをも」と願ひ出た、人の安寧を自分自身のこととして願う紫の上を頼みとするほかなかった。光源氏には紫の上の願ひ出が切なくてならなかったが、愛情は年来の願ひだという出家を先延ばしにしている理由である。出家したい、それはならない、というやりとりがトートロジーになると、物語としての魅力は乏しいかもしれないが、物語から真実を示す式として注目しなければならない。そこには紫の上と光源氏の決して失うまいとしているものが如実に表現されているといえよう。紫の上が六条院から退場せざるを得なくなるのは、六条院の〈日常〉の特異さを際立たせる〈物語〉の理想が強く意識された時でなければ

ばならなかったのである。

〔注〕

(1) 『源氏物語』の本文は、石田穰二・清水好子校注『源氏物語一〇八』（新潮日本古典集成、新潮社、一九七六年）（一九八五年初版）を主に参照して引用した。引用に際しては、かなを漢字に改める程度の変更を若干加え、末尾に巻名、参照したテキストの巻数、頁数を付した。また、本文中の呼称を引用して人物名を記す場合は、適宜括弧内に通称を示した。

(2) 和歌文学の用例は『新編国歌大観』（CD-ROM版、角川書店、二〇〇三年）から、一部のかな・漢字の表記を改めて引用し、集名、巻数、部立、作者名（無記名は詠人知らず）、歌番号、また、必要に応じて詞書等を付した。

(3) 以下、先行研究を引用する場合は、文中に、論文の題名、執筆者名、掲載誌・著書名、発行年を明記したことを注記しておく。また、その他の資料や注釈は、源氏物語古注集成（桜楓社）などの一般に利用可能な図書、また、『湖月抄』は人間文化研究機構国文学研究資料館のホームページ上のデジタル画像資料から引用したが、古注釈書以外の図書は、文中にその都度、発行元、発行年等を明記しておいた。

(4) 『源氏物語』の大島本（古代学協会・古代学研究所編『大島本源氏物語』角川書店、一九九六年）の「関屋」には「おほそう」に「大惣」という傍記がある。「惣」は「惣」の譌字で、せわしい、また、苦しむの意がある。「さ」と「そ」については、池田亀鑑『源氏物語大成』（中央公論社、普及版再版一九八九年）の凡例にあるとおりであるが、「う（字母宇）」と「う（字母良）」は誤写しやすいこともあり、問題の「若菜下」の用例

にも、「おほそら」の異文がある。ただし、これは、『源氏物語大成』によると、陽明文庫本（陽明文庫編『源氏物語』（陽明叢書、思文閣出版、一九七九〜八二年）で確認した）と中京大学本のみであり、「おほそらなり」の用例全体的には「おほそら」が優位であることを注記しておく。

(5) 『うつほ物語』の本文については、室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫編『うつほ物語の総合研究Ⅰ』（勉誠出版、一九九九年）に基づき、「おほそら」から改めていない用例を引用したことを注記しておく。引用に際しては、物語の巻名を付し、また、便宜上、中野幸一校注・訳『うつほ物語（一）』（二）』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九九〜二〇〇二年）の巻数、頁数を末尾に付した。

(6) 『白氏文集』の本文は、岡村繁著『白氏文集（三）』（新釈漢文大系、明治書院、一九八八年）を参照して詩番号を付して引用したが、平安時代の漢詩撰集の異文を併記したり、訓読文を作り替えたりした。